「南洲翁遺訓」について

第七話

第三十六条　「同一化」の心得と「行動のエネルギー」。

　歴史とは人物の物語である。故に人物像を学ぶのが最も大切なことである。西郷の「道の人」と称せられる人格は「三州士魂」の影響もあろうし、高徳僧であり勤王僧でもあった「無参和尚」から禅機による境地も得たであろう。

注1)　三州
南九州の薩摩、大隅、日向のこと

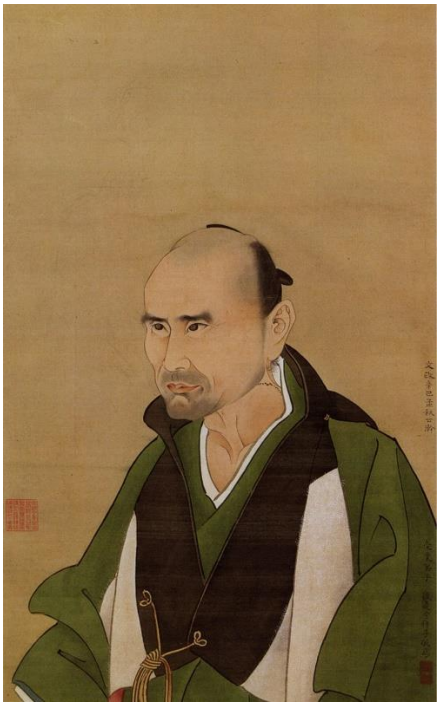
注2)　無参和尚
島津家の菩提寺福昌寺の住職を務めた人物。　西郷隆盛や大久保利通を指南した。　南洲翁遺訓第五話参照。

　西郷の人格はこれらの日本思想史に大きな影響を与えた「儒教」によるものであろう。西洋思想は人間自身が世界を秩序する主人公であり、自然は人間が開発する対象と見ている。日本では、思想史に大きな影響を与えた儒教に於いては「天人合一思想」という概念が大きなウエイトを示す。人間は人間を超越した天というものから宿命的な役割を与えられ、それを感じ、己の使命感として動機づけられ行動する...という概念といえよう。西郷の厳しい自己規律、自己を恃（たの）む克己心は天から支えられることで生まれるのであろう。特に「佐藤一斎」経由の朱子学と陽明学は自らの行動指針、人生の基礎を培ったのである。　西郷は薩摩の陽明学を代表する加治屋町に塾を開いていた「伊藤潜龍」から青年期に強い影響を受けているのであろう。

注）天人合一
天と人を対立するものとせず，本来それは一体のものであるとする思想，あるいはその一体性の回復を目ざす修養，または一体となった境地。

　佐藤一斎の特徴の第一は「立志」であり、自己に対する強い矜持（きょうじ）であり、これは西郷の克己に一直線につながる思想だ。第二は「天人合一思想」であり、儒教の大衆化をもたらしたし、又幕末の対外的危機意識を活性化させたといえよう。人間は社会が不安定化すると、改めて「己は何をする為に生まれて

きたのか」・「危機の社会に生きている自分は何者なのか」という人間観・死生観を突き付けられるようだ。このような危機を背景に自己の「存在意義」を問い続ける多くの人々に、にわかに「天人合一思想」を蘇（よみがえ）らせたのが明治維新にと繋がっていく。



佐藤 一斎

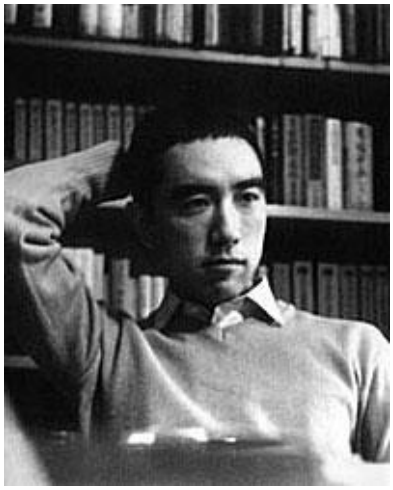
西洋文明の激流に対して「国の本体」を思い、「立志」が生じ、己の「内面」と「天」との「一体化」を感じとり、特別な自己使命感を抱くことができ、己の存在感を志士たちは確認したのであろう。一斎の「言志録」には西郷の「敬天愛人」と強く響き合う一節がある。

「人は須（すべか）らく自らを省察すべし、天は何の故に我が身を生み出し、我をして果たして何の用に供せしむる。我、既（すで）に天物なれば、必ず天役あり。天役共（きょう）せずんば、天の咎（とが）め必ず至らん、を、省察ここに至れば、則ち我が身の苟且（かりそめ）に生く可からざるを知る」...と、かくの如く「天人合一思想」は自己と社会、即ち幕末維新期の日本と西郷を含めた多くの志士達を繋ぐ役割を果たしていたのである。三島由紀夫は晩年、西郷を陽明学者として、遺訓第３６条を引き乍ら高く評価している。

第六話では西郷が最も不遇の時代、嘗て私淑（ししゅく）した斉彬（なりあき

ら）を失い、失意の中で敬天愛人の如き天地の理を体得されたのは、克己勉励（こっきべんれい）を流島によって実践されたからである。そこで西郷は、激しい自己規律・克己心を心身に帯びてこそ、己の果たすべき使命・天命は天によって支えられることを悟る。西郷が特に深く学んだのは、革命思想を含む陽明学であったと言われている。

西郷は他者にとっての危機を自分のものとして背負う気概や他者への愛を抱くようになったのは、佐藤一斎の陽明学が西郷の思想的系譜となって、南洲翁遺訓によって後世にまで伝わっている。これは「未完の西郷隆盛」の著者先崎氏も指摘しておられる。三島由紀夫も陽明学者として、西郷を高く評価している。



三島　由紀夫

「革命哲学としての陽明学」では、その３６条とは？

＜遺訓３６条＞

聖賢に成らんと欲する志無く、古人の事跡を見、迚（とても）企（くわだて）及ばぬと言う様なる心ならば、戦に臨みて逃ぐるより猶（なお）、卑怯（ひきょう）なり。朱子も白刃を見て逃ぐる者はどうもならぬと言われたり。誠意を以て聖賢の書を読み、その処分せられたる心を身に体（たい）し心に験（けん）する修行致さず、唯（ただ）か様の言、か様な事と言うのみを知りたるとも、何の詮（せん）なきもの也。予、今は人の論を聞くに、何程尤（もっと）も論するとも、処分に心行き渡らず、唯、口舌（くぜつ）の上のみならば、少しも感づる心これなし。真にその処分ある人を見れば実に感じ入る也。聖賢の書を空しく読むのみならば、譬（たとえ）ば人の剣術を傍観するも同じにて、少しも自分に得心出来

ず。自分に得心出来ずば、万一立ち合えと申されし時、逃ぐるより外ある間敷（まじき）也。

三島は西郷の遺訓第 36 条を引きながら、次の如く述べている。中略、このような同一化の可能性が生じないで、ただ大人しくこれを学び、ひたすら聖人に及ばざることのみ考えているところからは決して行動のエネルギーは湧いてはこない。同一化とは自分の中の空虚を巨人の中の空虚と同一視することであり、自分の得たニヒリズムをもっと巨大なニヒリズムと同一化することである....と。三島が何を言わんとしているかというと「すなわち、儒教で理想視される偉大な過去の人物になろうという意志がなく、とても自分は駄目だと思っているようでは卑怯である。ただ知識としてのみ、彼等を知っても意味がない。口先だけで行動に移さなければ、少しも人の心を動かす事はない」....。この西郷の言葉に、三島は「同一化」の心得と「行動のエネルギー」を読み取ったのである。参考とした先崎氏は、「これは正確な解釈と言ってよい！！」と評価されている。

（先崎彰容氏、西郷遺訓より参照）

＜遺訓 36 条の訳＞

知徳の優れた人になろうとする志がなく、昔の賢士の史実を見て、自分はとうてい企て及ぶことなど無理なことだ、と思うような心を持つならば、戦いに臨んで逃げるより、更に卑怯なことだ。

朱子は「刀の抜身を見て逃げる者は、どうしようもない人間だ」と言われた。真心で賢人の書を読み、その変らぬ不動の精神を受け継ぐ修業をせず、単に賢人の行為や言葉を知るだけでは、何の役にも立たない。知識としてのみで議論や討論しても、その精神が日常の行動として反映されねば、単なる口先のみとして少しも意味を感じないが、その精神を行動で実践できれば人は立派だと感じ入るのである。

賢人の書をうわべだけで読むなら、ちょうど他人の剣術をそばから見るのと同じで、少しも自分に納得のいく精神は得られない。自分が納得、感動が得られなければ、万一試合を求められた時、逃げるより他ないであろう。

我々は高邁（こうまい）な知識をどんなに学んでも、技術論や人生論を習っても本人が道を究めようという強い信念・高い志・勇気をもって実践しなければ、

「己の身に深く刻み込まれることが無い」ことは、私自身が武道で強く感じてきた。いざ実践となると何の役にも立たない。目標までの近き道など決して無く、遠い道のりを感じ「自分にはとうてい無理だ」と諦めて前進を止めてしまう人を多く見てきた。これは「己に対する甘えであり、逃げであり、卑怯者のすることだ」と西郷は述べている。

しかし全てのことが強く、連続した意志が必要だが、それは同時に苦しく迷い悩む道でもある。私の師から教えて頂いたように「勝つことより、負けない・くじけない・倒れても何度でも起き上がり半歩でも前に進む強烈な意志と勇気が必要な道」でもあろう。私は郷里薩摩の地で教え込まれた「島津日新公のいろは歌」に**『いにしへの　道を聞いても　唱えても　わが行いにせずば　甲斐なし』**がある。この歌を西郷も幼少時代から唱え、この遺訓 36 条が語り伝えられたと思う。道を踏み行い、志を成し遂げることは容易なことではないことは確かなことではある。しかし西郷はそれを楽しめと言っている。結手。

注）島津日新公いろは歌の一部

い　いにしへの道を聞きても唱へても　わが行に　せずばかひなし

⇒昔の賢者の立派な教えや学問も口に唱えるだけでは、役に立たない。
　実践、実行することがもっとも大事である。

ろ　楼の上もはにふの小屋も住む人の　心にこそは　高きいやしき

⇒立派な御殿に住んでいようと、粗末な小屋に住んでいようとも、
　それで人間の価値は判断できない。心のあり方によってこそ真価が決まる。

は　はかなくも明日の命を頼むかな　今日も今日と　学びをばせで

⇒明日のことは誰もわからない。勉学修行を明日に引き延ばし、
　もし明日自分が死んだらどうするのか。今この時を大切にすべきだ。

令和元年（２０１９年）１０月１３日

志雲会代表　　有　馬　正　能